連載「つたえること・つたわるもの」№196

歯科医師の証言で「原爆の日」を、やなせたかしの遺言で「敗戦の日」を、まど・みちおの童謡詩で「ほんとうの平和」を考える

健康ジャーナリスト　原山建郎

１．歯科医師の証言――広島爆心地へ最初に救護に入ったのは歯科医師だった

戦後 80 年となる今年、2025 年 8 月 6 日に「平和記念日（広島市）」、8 月 9 日に「県民祈りの日（長崎市）」、8 月 15 日に「敗戦の日」を迎えます。かつてマスコミ報道でよく使われた「原爆記念日」や「終戦記念日」（正式には「戦没者を追悼し平和を祈念する日」）が、近年では、「ヒロシマ原爆の日」、「ナガサキ原爆の日」、「敗戦の日」と呼ばれるようになりました。

そもそも「記念日」とは、「特定の出来事を記憶し、祝う日のこと」であり、300 万人以上の戦争犠牲者を失った太平洋戦争の敗戦は、文字どおり「（平和への）祈念日」と呼ぶべきではないでしょうか。

すでに本コラム№166『**ロシアのウクライナ侵攻――ハチントンが予言した「の衝突」文明**』のなかで、「広島投下の夜の原爆被災者の医療救援に向った」歯科医師の講演録（「日本海軍歯科医官の歴史」）の一部を紹介しましたが、先月発行された『日本歯科評論』2025 年 7 月号（通刊 993 号）掲載の Contribution（寄稿）「広島爆心地へ最初に救護に入ったのは歯科医師だった」、121～127 ページ）の抜き刷り（著者は、日本歯科大学理事長・中原泉さん）を、私の友人で歯科の主治医・齋藤俊夫さんからいただいたので、その続報をお届けします。

『日本歯科評論』2025 年 7 月号／寄稿記事の抜き刷り

この原稿をまとめるに至った経緯について、著者の中原さんは、次のように書いています。

戦後 80 年、被団協のノーベル平和賞受賞の年に、校友・齋藤俊夫先生（元『歯科ペンクラブ』代表・齋藤貞雄先生のご子息）より、埋もれていた広島原爆に関する資料の提供を受けた。斯界に広報し記録すべき史料と愚考し、まとめたのが本稿である

（『日本歯科評論』抜き刷り 121 ページ）

斎藤俊夫さんの父上・齊藤貞雄さんの貴重な「証言」を紹介しながら、原爆投下という残虐行為、人間を駆り立てる「戦争の狂気」について、改めて考えたいと思います。この原稿は、広島県賀茂郡乃美尾村（現東広島市）にあった賀茂郡海軍衛生学校の教室の描写から始まります。

★賀茂郡の賀茂海軍衛生学校

「課業開始間もなく、〇八一五（8：15）外科実習教室において受講中、突如、眼前を白きマグネシュームをたきし如き閃光の走りたる直後、ドカンという衝撃波が、教室の窓を震わす。一瞬のことなり。」

海軍歯科見習尉官の齋藤貞雄の証言である。広島県賀茂郡乃美尾村の賀茂海軍衛生学校の教室、昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分であった。（中略）

「爆風の吹き来たりしと思はるる西の広島方面を見上げるに、透き通るがごとき紺碧の美しき夏空に、キノコ状をなしたる真白き巨大なる雲の渦を巻き、モクモクと上へ上へと押し合ふがごとく昇り行くを見る。

学友の一人が、「これは広島の陸軍の爆薬庫でも爆発したるに非ずや」とつぶやく。それにしては、あまりにもキノコ雲の不気味にして、怪異なる形状に一同不安に駆らるる。

「本校某教官は同時刻、グランドより教官室方向に向かう途中閃光の震動をうけ、明確にキノコ

雲の発生と成長を目撃す。キノコ雲は、白、赤、黄、青紫、そして白と変化したといふ。また閃光と同時に山稜に落下傘の降下するを望見し、降下アメリカ兵がおれば、ただちに捕虜とするよう学校本部に連絡せりといふ。」

「呆然と見上げる我らの上に、キノコ雲は生物のごとくますます大きくふくれ上がり、刻々と変化しつつ先端のカサ部分が、青空を押し上げるがごとく中空に達する。正に悪魔の化身なるべし、しかしその時期知らず。

あのキノコ雲の下に広島の軍官市民、老若男女を問わず、十万人が一瞬のうちにその身体を爆裂し焼き尽され、生命を失っていたとは。またその後、数時間のうちに我ら第十一分隊は、その阿鼻叫喚の地獄の地に救援を命ぜられるとは。」（齋藤貞雄証言）

（『日本歯科評論』抜き刷り 122 ページ）

8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島市の爆心地まで約 30 キロの距離にある、賀茂海軍衛生学校の教室から見えたキノコ雲は、文字どおり「悪魔の化身」そのものでした。

東広島市（旧賀茂郡）ホームページには、――8 月 7 日夕方に広島市への出動命令を受けました。必要な衛生資材をトラック 2 台に積み、隊員約 70 名が 8 日早朝、衛生学校を出発しました。9 日昼近く、（※広島市西区横川町の国鉄）横川駅付近に到着し、救護活動を行いました。――と書かれています。

広島爆心地に向かう途中の緊迫した光景が、斎藤さんの「証言」で活写されています。

★歯科見習尉官の救護隊

「正午過ぎ、呉鎮守府長官より学校長あて出動命令あり。救援隊長に第十一分隊監事の森本正紀軍医少佐、同補佐の第十二分隊監事の島筒康夫軍医大尉、我ら第十一分隊の隊員五十名の歯科見習尉官全員に出動命令が下る。第三種軍装に短剣を吊り準備を整え、一七三〇（17：30）に救護隊を編成した。副官の訓示をうけ、トラック三台に分乗出発す。途中、呉海軍病院において約千人の治療品を積載す。」（齋藤貞雄証言）（中略）

「呉海軍病院副官より隊長らに『従来の戦場で、まったく経験しない新型爆弾（副官はドイツ語にて、エトワス・ノイエス【※何か新しいもの】と言ふ）の攻撃をうけ、広島市に甚大な被害を生じたり。現場陸軍衛生部隊も殆んど全滅し、また再度攻撃を受ける恐れあり。充分注意して活動するように』との訓示を受けたり。

しかるに、我らもとより新型爆弾の何たるかも知らず。むしろ平常教育日課の厳しさより脱けられたと、上陸気分に心中騒ぐのをいかんともし難し。」（齋藤貞雄証言）

（『日本歯科評論』抜き刷り 123～124 ページ）

筆者（中原さん）の説明によると、広島に投下された原子爆弾、コードネーム「リトルボーイ」は、広島市中心街の上空、高度約 600 メートルで炸裂し、その直撃を受けた人は 3000R（レントゲン）／時で即死、周辺部で 600R／時を受けた人は後に全員死亡、400R／時は半数死亡、200R／時は三分の一が死亡したといいます。

「トラックの荷台に輪となり座り、呉の街を揺られながら、瀬戸内海の海岸寄りの道路を広島に向かふ。すでに周囲は暗黒の闇なり。」（中略）

「さらにすすむに、広島の上空赤く燃えて空を焦し、その明りに瀬戸内海に映える。大小の島に黒く点在する間に、また数隻の艦船あるいは沈没してマスト煙突のみを海上に残せしもの、あるいは島々の影にかくれて逃げるがごとく浮かぶ艦影を見る。かつての艨艟（もうどう：軍艦）いずこにありや。幽寂たる光景に思はず身の震ひを感ず。呉街道の緊張を増した我らを乗せ、トラックは広島に近づく。」（齋藤貞雄証言）

（『日本歯科評論』抜き刷り 123～124 ページ）

原爆投下直後の爆心地に到着した齋藤さんたちが目にした、夥しい数の被爆者たち――原爆の熱線で皮膚が焼けただれた、凄惨極まりないそのありさまは、焦熱地獄そのものでした。

★広島爆心地の被災者たち

「周囲一面は累々としてのたうち回り、また救いを求めさまよい歩く無数の被爆者の群れである。被爆者の皮膚は一目見たところはどす黒いのだが、火傷の手当にリバノールガーゼを貼付しようとして手を触れると、ぺろんと焼けただれた上皮がむけて、その下に点々と出血班のある焦げて薄黒味がかって、桃色にふくれ上がった皮下脂肪組織が現れる。」（齋藤貞雄）

「助けてください、軍医さん」。地の底からうめくような細い声と共に、草むらの中から手が伸びて腕をつかまれた。その手掌が原爆の熱線で皮膚がただれ、水泡状になってヌルリと上皮が剝けて、こちらの腕にまつわり付いた。患者は滑って又どぶの中に落ちて息絶えた。燃え盛る地獄の業火を背に、あっちこっちで一人又一人と死んでいく。」（齋藤貞雄）

「あの暑い気温の空気の中で、原爆の熱線の為に焼けただれ、水疱火ぶくれに被われてしまった被災者達は、どんなに辛かっただろうか。苦痛から少しでも逃れ様と汚い泥の水溜まり、どぶの中に身体を倒してのたうち回っても、そのどろ水も温かくなっていては、熱感を冷やすどころか、水ぶくれが裂け破れて血がにじみ、焦熱地獄を増幅するばかりである。

医療救護隊と言っても助ける術も無い。カンフルを少しばかり注射しても、何の役にも立たない。起き上がって少し歩いてはバタバタ倒れ、助けを求めてうめきながら絶命して行く。あの夜、不気味な暗黒の広島東練兵場の草むらの中で、我々を取り巻いて助けを求めて、うごめいていた何百、何千の被災者の内、何人の人が助かったのか、恐らくは殆んどの人達が今はもう生存していないだろう。我々海軍歯科医師達のあの時の、不眠不休の努力は所詮無駄だったのだろうか。

最後には医薬品もなくなり、ただ焼けぶくれた患者の目を、真水で洗ってやるだけになった。それで少しでも目を開けて、周囲が見える様になった被災者が、『軍医殿、目が見えました。ありがとうございました』と、嬉しそうに感謝された細い声を今でも忘れられない。（齋藤貞雄）

（『月刊歯科評論』抜き刷り 124～126 ページ）

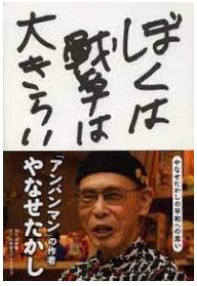
この原稿の締め括りとして、令和 4（2022）年に 100 歳で逝去された、海軍歯科見習尉官・齋藤貞雄さんが語った、次の「証言」が載っています。

「一瞬にして全市が壊滅状態になった広島の爆心地に、いち早く乗り込んで、世界で初めての原爆障害者に医療救護活動を組織的に行ったのが、実は歯科医師であった事は余り知られていない。」

（『月刊歯科評論』抜き刷り 126 ページ）

2．『アンパンマンの遺書』『ぼくは戦争大きらい』――〈やなせたかしの遺言〉で「敗戦の日」を考える

この 4 月から始まった NHK の連続テレビ小説『あんぱん』の主人公のモデルになった漫画家、「アンパンマン」の作者でもあるやなせたかしさんの著書『アンパンマンの遺書』（岩波書店、1995 年）、『ぼくは戦争大きらい』（小学館、2013 年）に中から、やなせさんがいう「正義のための戦いなんてどこにもない。逆転しない正義とは献身と愛だ。」――「アンパンマン」を通して伝えたいと考えたという――最重要のテーマについて考えてみましょう。



岩波書店　1955 年　／　小学館　2013 年

▲「やなせたかし」のプロフィール

本名は柳瀬嵩（やなせたかし）。1919（大正 8）年、高知県生まれ。東京高等工芸学校工芸図案科（現千葉大学）卒業。東京田辺製薬宣伝部に入社後、徴兵され、小倉の第 12 師団西部 73 部隊に入隊。野戦重砲隊に配属される。復員後、高知新聞社に入社し、

のちに妻となる小松暢と共に、雑誌『月刊高知』を編集。その後、先に退社して東京に出た暢を追うようにして上京。代議士の秘書となった暢の下宿先に転がり込み、やなせは三越宣伝部にグラフィックデザイナーとして勤務。1953（昭和28）年、退社してフリーとなり、作詞家、舞台美術家、放送作家として活躍。1973年にフレーベル館の月刊絵本『キンダーおはなしえほん』に『あんぱんまん』を掲載。1988年にはテレビアニメ番組『それいけ！アンパンマン』が放映され、全国的な人気となる。「手のひらを太陽に」の作詞も。2013年10月13日死去、享年94歳。

連続テレビ小説「あんぱん」では、「アンパンマン」を生み出したやなせたかし（役名柳井嵩 as 本名柳瀬嵩）さんと暢（役名若松暢 as 本名小松暢）さんの夫婦をモデルに、生きる意味も失っていた苦悩の日々と、それでも夢を忘れずに生きた二人の人生を描いています。このドラマでは二人が幼馴染みに設定されていますが、実際には高知新聞の記者に採用されたときが、初めての出会いだったのです。

■ 『アンパンマンの遺書』を読む

★ 国破れて山河あり

軍国主義から民主主義へ。しかし、デモクラシーというのが本当はまだ誰にも解っていなくて右往左往していた。雑誌がやたらに創刊され、出版されれば必ず売れた。長い間活字に飢えていたのだ。そして漫画もまた、盛大に復活しつつあった。

ぼくは優れた知性の人間ではない。何をやらせても中ぐらいで、むつかしいことは理解できない。子供の時から忠君愛国の思想で育てられ、天皇は神で、日本の戦争は聖戦で、正義の戦いと言われればそのとおりと思っていた。正義のために戦うのだから生命をすてるのも仕方がないと思った。しかし、正義のための戦いなんてどこにもないのだ。

正義は或る日突然逆転する。

正義は信じがたい。

ぼくは骨身に徹してこのことを知った。これが戦後のぼくの思想の基本になる。

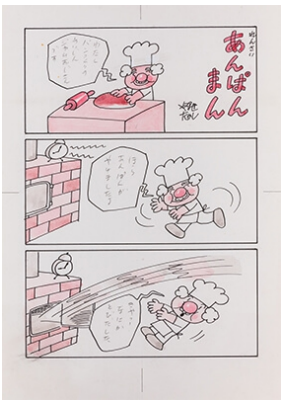
逆転しない正義とは献身と愛だ。それも決して大げさなことではなく、眼の前で餓死しそうな人がいるとすれば、その人に一片のパンを与えること。これがアンパンマンの原点になるのだが、まだアンパンマンは影もかたちもない。

とにかくぼくはまず生計を立てなければならない。既に二十七歳で、空白は大きく、いったい何をしたらいいのか、なにも解らなかった。

（『アンパンマンの遺書』　60～61ページ）

★ ほんとうの正義というものは

ところで、アンパンマンと片仮名になったのはもっと後のことで、最初の絵本は『あんぱんまん』と平仮名である。つまり、幼児絵本は平仮名という公式にしたがった。片仮名にかえたのは、パンという感じがどうも片仮名でないとぼくにはぴんとこない。記号には過ぎないが、あんぱんとアンパンでは微妙にちがう。そこでぼくの好きなのはアンパンの方である。



幼児絵本『いちごえほん』連載マンガの題名は、
「あんぱんまん」から→「アンパンマン」へ

ということで、『アンパンマン』は（1973年）フレーベル館からやっと出版された。

この絵本に登場したアンパンマンは、ぼろぼろのつぎはぎだらけのマントである。正義のためのたたかう人はたぶん貧しくて新しいマントは買えないと思ったからだが、今の子供たちに受け入れられるとは思わなかった。奇妙な絵本としてすぐに忘れられると思った。

それでいい。所詮、ぼくは裏町の人。陽の当たる場所に出ることはもうあきらめていた。（中略）

この最初の絵本で、ぼくが描きたかったのは、顔を食べさせて、顔がなくなってしまったアンパンマンが空を飛ぶところだ。

顔がないということは、無名ということ。

『あんぱんまん』は誰にも期待されないで出発した。(※最初の絵)本のあとがきにはこう書いてある。

子どもたちとおんなじに、ぼくもスーパーマンや仮面ものが大好きなのですが、いつもふしぎにおもうのは、大格闘しても着ているものが破れないし汚れない、だれのためにたたかっているのか、よくわからないということです。

ほんとうの正義というものは、けっしてかっこうのいいものではないし、そして、そのためにかならず自分も深く傷つくものです。そしてそういう捨身、献身の心なくしては正義は行えませんし、また、私たちが現在、ほんとうに困っていることといえば物価高や、公害、飢えということで、正義の超人はそのためにこそ、たたかわねばならないのです。

あんぱんまんは、やけこげだらけのボロボロの、こげ茶色のマントを着て、ひっそりと、はずかしそうに登場します。**自分を食べさせることによって、飢える人を救います。それでも顔は、気楽そうに笑っているのです。**

（『アンパンマンの遺書』　168～170 ページ）

■　『ぼくは戦争は大きらい』を読む

★　お粥で戦争はできない

上海に移動したぼくたちが向かったのは、上海郊外の朱渓鎮(しゅけいちん)という町でした。今は朱家角鎮(しゅかかくちん)となっていて、上海市の一部になっています。鎮というのは、都市よりも規模は小さいが人口が集まっている土地のことです。昔から水運が発達して、東京の築地のように各地から物産が集められて、交易が盛んでした。(中略)

上海に来て一番困ったのは、「上海決戦に備えて食糧を倹約せよ」という命令が出されたことでした。食事は朝晩だけ。それもご飯はうすいお粥です。腹が減ってしょうがないのです。

若い盛りにお粥で戦争をするのはムリです。腹が減っていたのでは決戦なんてできませんよ。

まわりは市場のようなところで、野菜も魚もいっぱいあるのに、兵隊は外に買いに行くことができません。見つかったら怒られます。

ぼくらは、お腹を空かせて我慢していました。

そのときには、野草をずいぶん食べました。

タンポポも食べました。タンポポは食べられるんだけど苦いんです。

クリーク（※内陸の水路）にいる魚は捕ってもいいのですが、寄生虫（※アニサキス）が怖いから生（なま）では食べられない。結局、お腹を空かせて我慢するしかなかったのです。

おもしろかったのは長野県の部隊の人たちです。彼らは山国から来ているから、ヘビや虫を食べるんです。「どうです。おいしいですよ」と勧めてくれるのだけど、見たら怖くて食べられません。器用に皮をピーッとむいて焼いたヘビをおいしそうに食べているのだけど、ダメでした。虫はイナゴや蜂の子です。これもダメでしたね。

ぼくが長生きなのは、あのとき野草を食べたからじゃないか、と言う人がいますが、そんなことはないのです。あのときぼくが骨身にいしみて感じたのは、食べる物がないことがどんなに辛くて情けないか、でした。いろいろ辛いことはあっても、空腹ほど辛いことはありません。

アンパンマンが自分の顔を食べさせてあげるのは、このときのぼくの体験があったからです。

（『ぼくは戦争は大きらい』　83～87 ページ）

★　ようやく故郷に戻る日が来た

あの頃は、そんなことよりも自分が生きるのが精一杯でした。弟を亡くして（弟の千尋は海軍特攻隊に志願し、22 歳でバーシー海峡：台湾南東部とフィリピン北端の間：に沈んだ。遺骨はなく骨壺の中には一片の木片が入っていた）悲しいのは、今のほうが 100 倍以上悲しいですよ。

弟が生きていればよかったのに、と毎日のように仏壇で千尋のことを祈っています。

ぼくよりも先にフィリピンから引き揚げてきた伯父のところにも行きました。がりがりに痩せてミイラのようなのでびっくりしました。

でも、戦争のことは何も話さずに帰ってきました。ぼくは戦争はきらいだから、早く忘れたかったんです。なかったことにしたかった。

ある日、一緒に復員してきた戦友が訪ねてきました。自分は廃品回収の仕事をしているので、手伝わないか、と言うので、手伝うことにしました。進駐軍をトラックで回って、廃品を集める仕事です。そこから使えそうなものを再生して闇市で売って儲けるのです。結構羽振りがいい商売でした。

進駐軍から回収してきた廃品の中にはアメリカの本がいっぱいありました。想定などは本当にきれいで、雑誌の広告もセンスがよいのです。

それを見ているうちに、デザインの仕事をまたやりたいな、という気持ちになってきました。（※戦争前、東京田辺製薬宣伝部でデザインの仕事をしていたが、徴兵されて戦地に。敗戦により復員した）

しばらく、廃品回収を手伝っていましたが、ちょうど地元の高知新聞で社員募集をしているのを見つけて、応募して新聞記者になりました。

入社試験の問題は、「高知の日曜市のことを記事にまとめよ」というものでした。ぼくは日曜市そのものを書いたのではおもしろくないので、日曜市に来ている人を取材すると、みんな高知新聞の受験者だった、というオチをつけた話にしたのです。これが試験官に受けたのかもしれません。

（※最初、社会部に配属されたが、新創刊された『月刊コウチ』編集部に異動。記事だけでなく、カット、漫画……何でもこなした）ここで出会ったのが、のちにぼくの奥さんになる女性（※小松暢）でした。彼女はぼくの目の前に座っていました。

これも運命なのでしょうね。

雑誌の仕事をするうちに、やはり東京で仕事をしたくなって、ぼくは東京に出て、三越の宣伝部に就職します。田辺製薬に戻ることも考えたのですが、帰って（※戦後）すぐに連絡したら、復職はムリだというので、ほかを探したのです。

（『ぼくは戦争は大きらい』　126～128 ページ）

↑やなせさんが手がけた三越のレタリング（包装紙）

★　東京の町は変わっていた

かつてぼくが働いていた東京の町は戦争ですっかり変わっていました。東京は何度も空襲を受けて、ほとんどが焼けてしまった。

焼け野原に、ぽつんぽつんとビルが建っているばかりで、あとはバラックがあるだけです。

新宿の歌舞伎町あたりもただの原っぱです。新橋は闇市場。

黒澤明の映画「酔いどれ天使」（※志村喬演ずる酔いどれ医師と、三船敏郎演ずる結核持ちのヤクザの交流を描く）そのままの世界でした。（中略）

町ではアメリカ軍が威張ってました。

銀座４丁目ではＭＰ（※軍警察）が交通整理をやってるんです。横には日本人の警官もいるんだけど、日本人は貧弱なんです。日本の子どもたちはみんなＭＰのまねをしたりしていました。

皇居前の第一生命の本館には連合軍の総司令部があって、アメリカ軍のマッカーサー元帥がいました。

いま、和光（※銀座四丁目交差点の北東角）になっている銀座の服部時計店は、アメリカ軍のＰＸ（Poste Xchange：軍隊の売店）で、アメリカ軍関係者でないと入れませんでした。日本の中にあるのに、普通の日本人が入ってはダメなのです。

日比谷の東京宝塚劇場（※戦時中は日本劇場と共に風船爆弾の製造工場）はアーニーパイル劇場（※Ernie Pyle Theatre：1945 年 4 月 18 日、沖縄県伊江島の戦闘で殉職した従軍記者の名前を冠した）と呼ばれて、アメリカ軍将校向けの劇場でした。そこから江利チエミやトニー谷などが育ってきたんです。ここにも日本人は入ることができませんでした。

日本人が入ってもいいのは、有楽町にあったファーマシーです。そこでは薬品を中心に、アメリカのものをいろいろ買うことができました。ぼくも東京に戻ってからはファーマシーまで、アメリカのものをよく買いに行ったものでした。

アメリカのものを目にしたり、手にする度に、アメリカはすごいなあ、と感心したものでした。ところが、日本が復興してからアメリカに行ってみると、以外にも向こうのデパートは貧弱なので驚きました。

（『ぼくは戦争は大きらい』　128～131 ページ）

★　おしまいに

ぼくは人を殺す戦争はきらいです。憎くもなんともない人を殺すのは嫌なのです。死ぬのも嫌だったけど、もう 94 歳になると、そっちのほうはどうでもよくなりました。（※2013 年 10 月、94 歳で逝去。同年 12 月、最後の著書『ぼくは戦争は大きらい』が出版された）戦争はしないほうがいい。

一度戦争をしたら、みんな戦争がきらいになりますよ。本当の戦争を知らないから「戦争をしろ」とか、「戦争をしたい」と考えるのです。

戦争映画などを見るとカッコイイと思うのかもしれませんが、本当は全然格好よくないのです。

アメリカではスーパーマーケットや学校で銃をぶっぱなす人がいますね。あれは映画やテレビの影響だと思います。悲惨ですね。

こんなことをいうと、「アンパンマンはばいきんまんをアンパンチでやっつけるじゃないか。あれはどうなんだ」と反論する人がいます。ばいきんまんは人じゃなくてばい菌です。しかも、やられたら「ばいばいきーん」と言い残して去っていきます。そして、また戻ってきて悪さをする。

アンパンマンとばいきんまんは、食べ物とばい菌です。だから仲良くしてもらっては困るのです。それでも、彼らはマンガの中でともに生きています。

ぼくが最近怖いな、と思うのは、殺菌とか除菌がブームになって、ばい菌というだけで目の敵にして消毒してしまうことなんです。たしかに、インフルエンザとかノロウイルスは怖い。でもなんでもかんでも殺菌してきれいにしてしまうのはおかしい。

無菌状態になると、今度は人間の抵抗力がなくなってしまいます。それでは本末転倒です。（中略）

ぼくは、戦争の原因は「飢え」と「欲」ではないか、と考えています。

腹が減ったから隣の国からとってこようとか、領土でも資源でもちゃんとあるのにもっと欲しいとか、そういうものが戦争につながるのです。

これは生き物の本能だから困ります。

狭い地面に別々の植物を植えておくと、いつの間にか、片方が勢力を伸ばして、片方が枯れているということがよくあります。ちょっとでも肥えた地面をたくさん手に入れようとする植物同士の戦争があって、片方が負けたのです。

動物でも人間でも同じことですよ。

ただ、人間は頭のいい生き物だから、なんとかできるのではないか、と思うのです。

ぼくが『アンパンマン』の中で描こうとしたのは、分け与えることで飢えはなくせるということと、嫌な相手とでも一緒に暮らすことはできるということです。

「マンガだからできることだ」「現実にはムリだ」なんて言わずに、若い人たちが真剣に考えてくれればうれしいです。

（『ぼくは戦争は大きらい』　138～141 ページ）

３．かけがえのない〈わたし〉、みんなそれぞれ尊い〈いのち〉――まど・みちおが「ぞうさん」で伝えたかったこと――

さきの参議院議員選挙で「日本人ファースト」を掲げて、党勢を大幅に拡大した政党があります。

現在のアメリカで進められる不法移民排除、反イスラエル・親パレスチナ排除、性的マイノリティの権利制限、ユネスコ（国連教育科学文化機関）や WHO（世界保健機関）、パリ協定（国連気候変動枠組み条約）からの脱退、貿易赤字縮小を目論む輸入関税大幅アップなどなど、ドナルド・トランプ大統領が選挙スローガンに掲げた「MAGA（メイク・アメリカ・

グレイト・アゲイン)」は、自分たちだけが正義であると主張する「アメリカ・ファースト（米国第一主義)」宣言であり、アメリカ国内はもとより、世界規模での深刻な差別と分断が、急速に拡大しています。

たとえば、エレベーターのドアを押さえて、お年寄りに順番を譲る「お先にどうぞ」を、英語では「**You go first**（あなたがお先に)」あるいは「**After you**（私はあなたの後から)」と言います。

その反対に、お年寄り、からだの不自由な人、妊婦さん、幼い子ども連れの母親を押しのけて、われ先にエレベーターに突進するような「俺さまファースト」が、私たちの正義だというのでしょうか。

ところで、『ぞうさん』、『やぎさんゆうびん』、『一ねんせいになったら』などの童謡詩で知られる、まど・みちおさんは、つねに「子どもたちの宇宙からの発信」に耳を傾ける、数少ない「大人」のひとりであり、その清らかな心に「子どもの宇宙」をもちつづける、稀有な「大人」なのです。もちろん、「**You first, Me second**.（まず、あなたから。次にわたし)」の人です。

たとえば、子どもからお年寄りまで、誰もが口ずさむ**『ぞうさん』**（團伊玖磨作曲）があります。

ぞうさん／ぞうさん
おはなが　ながいのね

そうよ
かあさんも　ながいのよ

ぞうさん／ぞうさん
だあれが　すきなの

あのね／かあさんが　すきなのよ

『サッちゃん』（大中恩作曲、1959 年）の作詞でも知られる、詩人で作家の阪田寛夫さんが、まど・みちおさんへの取材と親族の証言でまとめた『まどさん』（新潮社、1987 年）の中で、『ぞうさん』のことを書いています。

実は、阪田さんは 1978 年に雑誌に寄稿したエッセイに、戦後間もない上野動物園で、戦地から復員した「まど・みちお」が七歳の息子とゾウのいないゾウ舎を見つめていたというエピソードが載った新聞記事に心を打たれ、**〈二人とも、目に見えない象をそこに見た。悲しみを持った心にだけ見えたもの、それが「ぞうさん」だ。〉**と書いたのですが、その二年後、まどさんの口から直接、「それはフィクションです」と言われて、大きなショックを受けました。

まどさんは、「童謡はどんな受け取り方をされてもいいのだが、その歌が受け取ってもらいたがっているようにうけとってほしい」と前置きしたうえで、「ぞうさん」の「おはなが　ながいのね」という詩句は、子どものぞうの立場では「悪口」と受け取るのが当然だ、と言うのです。

さらに、「ぞうの子は、鼻がながいねと悪口を言われたときに、しょげたり腹を立てたりする代りに、一番好きなかあさんも長いのよ、と誇りを持って答えた。**それは、ぞうがぞうとして生かされていることが、すばらしいと思っているからです。だからこの歌は、ぞうに生まれてうれしいぞうの歌、と思われたがっているでしょう**」とも述べています。

思いがけない話の展開に、「目の色が違っても、髪の色が違っても、みんな仲よくしよう、などとよく言われますけれども」と戸惑う阪田さんに、まどさんは「私はそうではなくて、**目の色が違うから、肌の色が違うから、すばらしい。違うから、仲よくしようというんです**」と答えたといいます。

今回は、広島の爆心地へ最初に救護に入った歯科医師・齋藤貞雄さんの証言で「原爆の日」を、やなせたかしさんの遺言「正義のための戦いなんてどこにもない。逆転しない正義とは献身と愛だ」で「敗戦の日」を、まど・みちおさんの童謡詩『ぞうさん』で「**ほんとうの平和**」を考えながら、戦後 80 年目を迎えた戦没者への「鎮魂」を、そして世界の人た

ちとの「友愛」を願うコラムとなりました。